



(上) 有田焼万華鏡。世界初の陶磁器製万華鏡としてマスコミでも度々取り上げられ、町に有田焼再興のエネルギーをもたらす。佐賀市の無形文化財「副島硝子」などと提携。
 (中) 有田山。幾度も土の調合を試し、焼成時収縮を調整。
 (下) 万年筆の蓋をきっちり閉め、滑らかな書き味を実現するため、試行錯誤を繰り返す。

死を覚悟した病床にて、故郷を再興へと導くアイデアがひらめいた。

平成15（2003）年、佐賀ダンボール商会・副社長の石川慶藏氏は死をも覚悟する大病を患い、病室に万華鏡を持ち込んだ。そして、寶石や花火の美しい模様を心で癒され、病への恐れや焦りを払拭。退院後は、万華鏡を有田焼で製品化できないかと思いつく。愛着ある故郷の有田焼は、不況や安価な中国製品の輸入増により、かつての生彩を欠く。窯元のなかには、経営難から子孫に家業を継がせたくないと言う者もあった。

世界最高峰の技術者と提携し、かつてない新しい有田焼が誕生。

世界的な万華鏡作家の山見浩司氏との出会いに助けられ、業界で不可能とされてきたことへの挑戦が始まった。やがて、幾度となく土の調合を試すうち、焼成時の調整が可能になる。かつてない新しい有田焼万華鏡が誕生したのは、平成16年。予想を遥かに超える売上を記録した。

組むため、金具などの部品と組み合わせる万華鏡のような製品には不向き。石川氏の構想を危ぶむ声は多かった。

田焼を開発しようとの気運は、その後も高まり続ける。筆記具販売の老舗「丸善」との提携で、有田焼万年筆の構想が始動。さらに名窯「香蘭社」と「源右衛門窯」、世界最高峰のペン先作りを誇る「セーラー万年筆」の職人がタッグを組み、柔らかな書き味の機能性と伝統の美を両立させた。

Company Info.

故松下幸之助氏の衆知経営を実践し、故郷・有田町の再興に燃える。

平成13（2001）年、妻の実家がある有田町に帰郷した石川慶藏氏は、焼き物出荷用ダンボール製造業「佐賀ダンボール商会」を継ぐ。しかし、平成2年をピークに有田焼の出荷は激減。産地再生を模索するなか、平成15年、石川氏は大病を患う。この時、死をも覚悟して病床に持ち込んだのが万華鏡。他の入院患者にも好評で、皆口々に「元気が出た」と言う。これを有田焼で作れないものか、石川氏の取り組みが始まり、平成16年に完成。その後も町の再興を担う新しい有田焼を企画開発中だ。



石川慶藏さん/佐賀ダンボール商会副社長。鹿児島大学卒業後、松下電器産業などで31年勤務。故松下幸之助氏の衆知経営を実践し、有田焼万華鏡・万年筆を開発。

有限会社 佐賀ダンボール商会
 THE ARITA 商品開発研究所
 佐賀県西松浦郡有田町下本乙2496-1
 TEL.0955-43-2424
<http://www.arita-mangekyo.jp>



世界初「有田陶磁器製万年筆」。歴史ある美術工芸品と世界最高峰の筆記具が融合した新しい有田焼として高い注目を集め、約5カ月で1,500本を受注。

[佐賀県・有田町]

世界初! 磁器製万年筆等の有田焼高付加価値商品開発及び販売
有限会社 佐賀ダンボール商会



○活用する地域資源：伊万里・有田焼

絶望の淵にあった自身を癒し、救った万華鏡を故郷が誇る有田焼で作りたいという、佐賀ダンボール商会副社長・石川慶藏氏の思い。これが推進力となり、かつてない新しい有田焼が誕生。不可能を可能にした二連の取り組みは、町に有田焼再興のエネルギーをもたらす。万華鏡に続き、世界最高峰の技術が集結した有田焼万年筆の完成を導いた。

歴史ある美術工芸品と、世界最高峰の筆記具が融合した新しい有田焼。